高桑正敏さんの思い出

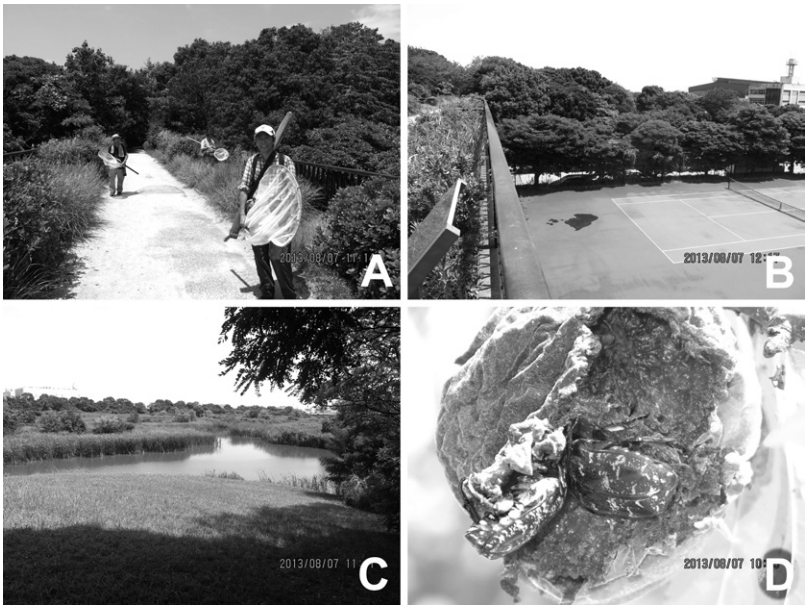
野村周平

高桑正敏さんが 8 月 25 日に亡くなってから, 2 ヶ月が過ぎたが，未だに現実感がない．9 月 19 日にお別れの会が開かれ，筆者も出席したが，多数のご友人（主に虫屋）が参加され，生前のご交友の広さが偲ばれた．

高桑さんに初めてお会いしたのは，筆者が科博に奉職することになって，九州から出てきた頃のことだと思うが，あまりよく覚えていない．その後も鞘翅学会，甲虫学会がらみでたびたびお会いする機会があって, 懇意にさせていただいた. 同じ甲虫をやっているといっても分野が違うので，採集にご一緒させていただくようなことはなかった．

しかしそのようなゆるい関係の中で，比較的最近に一度だけ，強烈な印象の出会いがあったので，ここで披露させていただきたい．2013 年 8 月 7 日，盛夏の天気のいい日でひどく暑かった．筆者は休日であったが，関東平地では数の少ないシラホシハナムグリが，東京港野鳥公園（大田区）で発生していることを聞きつけ，生態写真でも撮ってこよう, あわよくば死体の 1, 2 個でも拾ってこよう（園内は採集禁止なので）と，車で出かけた．野鳥公園につくと，長竿で樹冠をたたいている一団の人たちが園の外から見えた．遠慮しいしい近づいてみると，それは高桑さん，酒井香さん，寺山守さんという，いずれも顔見知りの昆虫学界の大御所たちだった．彼らは野鳥公園の昆虫相を調べるために，許可を取って，手弁当で採集調査を行っておられたのだった．そこへ偶々，シラホシハナムグリを見に来た筆者が出くわした，ということだった．お 3 人と一緒に炎天下の中，採集，撮影を行うことが出来，大変楽しい採集会になった．のちにこの時のエピソードを，品川区内での採集記録とまとめて,「林試の森から」という小文にして, 佐賀昆虫同好会の会誌「佐賀の昆虫」に投稿した．その別刷を高桑さんに差し上げたところ，大いに喜んでいただいたことが記憶に新しい．

このことがきっかけとなって，筆者は野鳥公園の昆虫調査に参加させていただくことになった．この調査は高桑さんが中心となって，数年間にわたり実施されており，現在でも継続中である．東京港野鳥公園は，1960 年代に，東京湾の一部を埋め立てて，現在の大田市場（野菜・花卉を取り扱う）の北隣にできた緑地である．年数が経っているので，現在ではクスノキなどの大木が亭々とそびえ立ち，りっぱな森林となっている．園内には森林以外にも，野鳥が好むような湿地や水辺が作られている．自然に成立した森林といえども, 元はといえば東京湾なので, 昆虫相はかなり貧弱である．しかし貧弱なりに，特定の種が幅をきかせており，多くの移入種が見られるなど，東京湾岸の人工緑地の特徴を示していて, 非常に興味深い．一例を挙げると，園内には 5 種のハナムグリ, すなわちリュウキュウツヤハナムグリ,



写真．A，東京港野鳥公園の昆虫相を調査する人々，右から高桑さん，寺山さん，酒井さん；B，東京港野鳥公園の景観，写真右手が大田市場；C，公園内に作られた水辺；D，園内のアンズ（？）の実に来たシラホシハナムグリ2頭.

カナブン，シロテンハナムグリ，シラホシハナムグリ，ハナムグリが大発生している．ハナムグリは春から初夏にかけて多く，その他の 4 種は盛夏にかけて，きわめて多くの個体が見られる．リュウキュウツヤハナムグリは明らかな国内移入種だが，そんなことをいうとすべての種が在来ではなく，外来種だということに気づかされる．

高桑さんはその面白味をいち早く察知して調査に乗り出されたのだと思う．移入生物研究の第一人者であった高桑さんの面目躍如である．この興味深い調査の中途で斃れられたことは，かえすがえすも残念でならない．高桑さんが亡くなったことで，我々調査チームは大変意気消沈したが，故人の遺志を引き継ぐことで，高桑さんのこれまでの熱意に報いたいと考えている．筆者はこれまでに何度か野鳥公園を訪れて，携帯用のライトトラップやバナナトラップによる採集調査を実施しているが，成果は必ずしも上がっておらず，お役に立てているかどうかはわからない．しかし全体としては，極めて興味深い成果が続々と集まってきているところなので，それがとりまとめられて，高桑さんの仕事に脚光が当たることを期待したい．

3 年前の偶然の邂逅の時の写真をここに掲げて，高桑さんを偲ぶよすがとしたい．天国の高桑さん！本当に有り難うございました！

（国立科学博物館動物研究部）

追憶・高桑さん

平山洋人

高校一年の春のこと，その少し前からチョウだけでは飽き足らずオサムシにも興味を抱き始めた私は，何かのきっかけで知った京浜昆虫同好会の機関紙 INSECT MAGAZINE の No.76「オサムシ特集号」がどうしても欲しくなり，当時できてまだ日の浅い月刊むし社 (現 むし社) に，「会員ではないのだが何とか入手できないだろうか？」という主旨の電話をかけた．勿論私は「購入する方法はないか？」というつもりだったのだが，電話に出られた方は「そうですねぇ，もしかしたらうちにもまだあるかも知れませんので，何なら来てみませんか.」との返事 (考えてみれば，これはなかなかにいい加減な対応である．あるかどうか確認していないのに,「来い」というのだから) だったので，電話を切るや高校前のバス停から早速中野行のバスに飛び乗った．

地図と住所を見比べながら探し当てた「月刊むし社」は，予想に反してオンボロ・アパートの 1 階の 1 室に過ぎなかった．おそるおそる戸を叩くと細身で長髪の大学生ぐらいの人が出てきたので，「先ほどお電話した平山という者ですが …」と告げるとその方は，「あぁ，オサ特の件の人ね」というと奥で仕事をしていた方 (今にして思えば小岩屋敏氏) に向かって「お〜い，お前まだいくらか持ってるだろ．1 冊よこせ！」とか声をかけて，多少汚れてはいるが初めて実物を見る「オサ特」を手渡してくれた．「おいくらでしょうか？」と尋ねるとその方は「あぁ，汚れてるから別にいいよ．持っていきなさい」．恐縮しながら挨拶もそこそこに失礼して一目散に帰宅した私は，翌日の明け方まで一気に「オサ特」を読みふけった．これが高桑さんとの初対面であった (この「オサ特」は，製本が悪かったので壊れる度にボンドで貼り付け，ガビガビで元の 1.5 倍くらいの厚さになった背表紙で，今も我が家の書棚に鎮座している).

翌年から藤田宏氏の誘いで木曜サロンへも顔を出し始め，高桑さんにもいろいろお話を聞くようになった．この年の夏休み，当時軽井沢にあった高校の寮をねじろに生物部の合宿と称して周辺を遊び回っていた際，寮の裏の山で葉から葉へ飛び伝っていた涙滴型の妙な甲虫を採集した．帰京後サロンへ持っていくと，高桑さん曰く「オオシラホシハナノミだ！本州 3 頭目！」．これが私の「ELYTRA」初投稿となった．生まれつき暑い所が嫌いで，多くの虫屋が憧れる離島や海外へも 1 回ずつしか行ったことがない (島は三宅島，海外は高桑さんたちと行った中国雲南省の調査団) 私だが，不思議とハナノミの珍品には縁があるようで，ある夏アカジマトラカミキリ採集に出かけた松本で採ってきた尾節板の太い不格好なハナノミは，高桑さんにあげたら本州 2 頭目，全国でも 3,4 頭目だかのヤクハナノミになった (この個体が保育社の「原色日本甲虫図鑑 (III)」の掲載個体である). オオシラホシハナノミも，その後も 2 頭ほど採って差し上げた．

1984 年刊行の講談社「日本産カミキリ大図鑑」の製作には私もお手伝いさせていただき，おかげで当時の日本産カミキリ全ての標本をビノキュラーで観察する機会を得られたのは自身非常に貴